

京都の放火殺人事件をみると、3年前の相模原の障害者施設襲撃事件を思う。

両事件とも、ひとりの犯人が多くの人を殺害した。

しかも、襲撃を受けた双方の施設とも、危害を加える旨の“予告”を受けていた。

京都は不特定な人物から、相模原は犯人が直接、施設長に伝えていた。

もちろん、それぞれの施設が予告を受けていたとして、事件が実際に起こるとは想定できなかっただろう。

このふたつの事件から、教訓が読み取れると感じている。その教訓とは防災に通じることでもある。いざというときの行動は、ひごろからリスクを認識する備えをしておき、その時にリスクが発生することを覚知することが必要である。



奇しくも同じ日の新聞に掲載された、相模原の障害者襲撃事件と京都の放火殺人事件

もっとも、事件や災害のように破綻的なリスクとは日常的に起こるものではないから、その時に判断力を駆使し、リスク回避をする行動力が必要である。非常に複雑な判断であ

るから、これは人間の脳にしかできないことである。今はやりのA I（人工知能）には無理なことである。

最近、A Iとはいわないまでも、事件や事故、災害のたびに、話題を提供してくれるのが「防犯カメラ」であるが、これは、単なる記録であり、事後の分析に役立ちにしても、警告の機能はもたない。

リスク回避行動を実現するには、人の目、人による声かけが一番なのだ。災害からの避難行動も、人の目、声かけが一番重要であることが分かっており、津波や水害の避難計画に位置づけられている。

先日、鉄道の駅から飛び込もうとした女子学生を、それを察知した女性がとっさに抱きしめて、難を逃れたというニュースがあった。もちろん、駅の防犯カメラはその様子をとらえていたであろうが、自殺防止には役立たなかった。ヨーロッパの鉄道の駅では、駅員の省力化はしないそうである。テロが日常的な環境では、やはり人の目がリスクマネジメントに欠かせないと考えているのだろう。

よく「平和ボケ」などとわいれるが、便利で表だった戦争がない世の中になればなるほどやはり、リスク認知、回避行動を可能にする備えが必要なのだと、2つの事件や最近の災害多発の状況をみて、あらためて考えるところである。

（令和元年7月）